少し変わっている武蔵の話

腐った饅頭

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
話をしよう
横須賀には少し変わった武蔵がいる
彼女は他の武蔵とは少し外見が違い
眼帯をし髪の所々が黒くなっている。
そんな彼女の話

この話は何かを考える度に思い付くから書いてみた。

もうひとつ書いている清掃船と同じ世界です。
ネタが思い浮かばなくて現在凍結中

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 6
第3話 …… 10
第4話 …… 15

第1話

　此処は横須賀鎮守内にある艦娘寮の一部屋
　そこに居るのはこの部屋の住人である武蔵だけだった。何故部屋に居るかと言われると、この部屋のもう一人の住人である姉の大和が本来武蔵が行うはずだった秘書艦としての仕事をしようとしたら「武蔵は働きすぎです。今日は私がしますので、たまには休んでください。」と言われその好意を無下に出来ず了承。休めと言われても何をすれば良いのか分からず、そういえば最近動いてないのを思い出し、経験と体を鈍らせないように演習をして取り戻そうとしたら、
　きょうはせいびちゅうですからえんしゅうできませんよ
　ー？
　と妖精さんに言われする事もなく、しょんぼりとしながら部屋に戻り本を読むことにしたのだった。
　そして武蔵は本を読みながら思いに更ける。

（そういえば私も此処で造られてからもう八年か、その間にいろんな事があったな。）
そう考え過去を振り返る。
今となっては外見が違うが、まだ他の武蔵と外見が違わなかった時のあの頃を。

～八年前～

「ふむ、では妖精さんこれで大型建造を頼む。」
そう言った声は重く深く響く渋い声だった。その声を発した者の名は忠盛源三。ここ横須賀鎮守府に着任して四十八年もたち御歳６８歳の老練の提督である。
戦力の増強ということで大型建造をしようと思ったのであった。
建造を実行するボタンの台の上で妖精さんはニヤニヤしながら答える。
ただもりさんこのしざいのりょうはまさか？
「察しが良いな妖精さんよ。妖精さんが考えている通り、今回は武蔵を造ろうと思って

おる。」

そう言った瞬間、工廠の隅から隅まで歓声が湧いた。

おぉー！とうとうむさしをつくるんですね！

おっしゃーやったらー！

ああふるえるぞぃぃぃぃとぉぉぉ！

やけつくほどひぃぃぃぃとぉぉぉ！

おれのトンカチがむさしをつくれととどろきさけぶっ！

さんらいといえろーごっとハンマーァァァッ！

「なんか色々と混ざっておるぞ妖精さんや？」

妖精達の狂喜乱舞っぷりには苦笑いが出てしまう提督だがそれも仕方ないかと思っていた。

この世界での建造はできる回数が少なく、月に一度出来たら良い方で半年に一回という鎮守府もあるそうだ。

更に言えば指定建造の場合は、更に多くの資材を使うためこれを行う人は少ない。する人が居たとしても、資材にかなりの余裕がある人だけだ。

故に提督は笑う。やっとこいつらに出せたんだと思い笑う。思えば二年、今日この時まで資材を貯めてきた。作戦や任務で何人も補給して資材が削られ、赤城が隠れて資材

を食べて、大規模作戦で長門や赤城が大破し、その修理におもッいきり資材を食われて、そしてまた赤城が隠れて資材を食べて、長かったと思えば短かったとも感じる。何とも不思議な感覚だ。

ふと思うがいい加減赤城に対して鳳翔直伝の特別演習メニューでも課した方が良いのだろうか？いくらなんでも食いすぎだと思う。

そこで考えるのを止め改めて騒いでいる妖精さん達を見る。

視線に気付き静かにしこちらを見返す妖精さん。

ふざけることは一切許されない雰囲気の中提督は口を開く。

「ではよろしく頼むぞ妖精さん」

おーけいですこうそくけんぞうざいは？

「頼んだ」

そこで妖精さんは笑い盛大に声をあげる。

さぁぁぁぁぁやろうどもぉぉぉぉ！こうそくけんぞうの時間だぁぁぁぁぁッッ!!

その声を聞いてそれを下記消す位の歓声が上がる。それを見て提督も笑い告げる。

「では始めよう」

そう言い台にあるボタンを押す。そしてボタンのの動きと連動してドックにあるタイマーがつく

時間８：００：００
そして妖精さんがドックの中にお馴染みの火炎放射みたいな高速建造が始まる。
そんな中妖精さんはヒャッハー☆！していた。
そしてドックにあるタイマーの時間が０になり、ドックのドアが開く。
そしてドックの中に居た女性は口を開く。
「フッ随分と待たせたようだな」
堂々としながらドックから出てくる。
「大和型戦艦二番艦、武蔵。参る！」
彼女は笑いながらそう名乗った

第2話

目が覚めたと思ったら目の前が真っ暗だった
イヤ何かしらの勝負に負けた訳じゃなく物理的に真っ暗
本当に真っ暗。自分の体すら見えない。更に何も聞こえない。
んで何故か動こうにも動けねーし、更に何も聞こえない、自分の体すら見えねぇ状況の中、どうしてこうなったと思いながら寝る前の事を思い出す。
確かあれはん～～？何でだ？全然思い出せない。て言うかまず俺は誰だ？
イヤまてまて！コレはおかしい何で自分の名前を忘れてるんだ!?
思い出せ、思い出せ！思い出すんだ俺！
チッ！全然思い出せねえ。頭の中に霧があって記憶の存在を隠してる感じだなクソッタレが！
せめても思い出せるのが知識ぐらいか・・・そういやなんかの本でこんなこと書いてたっけ？
記憶喪失したとしても一時的に消えるのは思い出とかであって、知識が無くなることはないだったけな？

具体的に言うとりんごは植物で紅く食べることができるのは分かるが、どんな味だったか解らないと言うことだ。
結局何も思い出せねぇや。まぁ良いやとりあえず現在の状況を纏めてみるか。
暗いよくわからん場所に居る
何も聞こえず動くことが出来ない
記憶喪失
ぐらいか。全く最悪な状況だぜコンチクショウがいったい全体どういうことだ？何が起きてやがる？
ん？考えてて分かんなかったが目の前辺りがうるせーな？と思ったらいきなり黙りやがった。
ん？今度は明るくなったな？今度は何が起きるんだよゴラァ！
そんな風に考えていると周囲の空間が熱くなってきた。
イヤ待て熱くなってきた？暑くなってきたじゃなく？熱くなってきただと？なにがおきてんだぁぁぁぁッッ!!
ぁぁぁぁぁッッ！なんっだっコレッ！アッチィィィオァァァァァ背中がぁッ焼けるぅぅぅ様に熱いイイイイ！。
そう言い何も無かった彼？はその姿が造り出される。まず最初に足が造られ、そして

上に上がっていくように太股、腹、胴と共に腕が造られ、最後に頭が造られる。
のっぺりとした何も無い平坦の顔だが、目、鼻、口と削るように造られて行く、その鋼色の肌は、色が浮き出るように褐色の肌が生み出されて行く。
更に背中側から光が走り、その光が集まり艦装を造り出す。最後に顔の目の前に光が集まりメガネを造りそこで終わる。
そしてその全ての行程が終わった時そこに佇むのは一人の女性だった。
褐色の肌、乳白色の髪、１７０ｃｍ１８０ｃｍは有るであろう伸長、そして一番目を引くのは背中側から出ている４６ｃｍ三連装砲、体を囲うように出ている１５．５ｃｍ三連装副砲の付いた艦装を付け、目を閉じて立っていた。
彼女は光が見える先に進む。そこには道はない。だがそれでも彼女は堂々と進む。そして光を全身で浴びる。何者かの姿を見たとき彼女は無意識の内に言っていた。
「フッ随分と待たせたようだな」
彼女は気づかぬ内に笑いながら
「大和型戦艦二番艦、武蔵。参る！」
と言い放った。
そして彼女の中の彼？は
（ウエィッ!?なーに言っちゃってんの俺!?まてまてまてまてその前に俺は何て言った？

大和型戦艦二番艦、武蔵だと？大和型とか言うから宮本の方じゃない。だが戦艦？）

彼？は記憶喪失だ。だが忘れたのは記憶であって。知識ではない。故にこっちになる前に知っていた知識から一つの項目が当てはまる。

（戦艦と言っていたのだから船の姿をしているべき、だが今の俺の姿は完全に人、人の姿で艦の名が出ていたのはあれだけだったよな？）

そして考えた結果がでて顔には出さないけど内心は泣きたい気持ちで結論を出す。

（あぁ今は顔も姿解らない両親よ、私は艦これというゲームの世界に来てしまったようです。泣きたい。）

第3話

どうしてこうなった

目の前には十を超える敵艦。対してこちらは自分だけ。正確に言えば自分と姿が同じ奴が居るが敵でも味方でもない。

いったい何がどうやったらいきなり戦場に立たせられるんだ。

ただ私は造られて初の一日を乗りきっただけなのにどうしてこうなっただろうと思い、今に至るまでを思い出す。

それにしてもどうしようか？まさか二次小説のように憑依するとは思わなんだな。

それにこの体の本来の持ち主は武蔵なのに自分のような意味の解らない存在がこの体を使ってしまっても良いのだろうか？

そんな風に考えていると目の前の老人から話しかけられる。

「おーい？武蔵や考えている所すまんが色々と案内したいんじゃが？」
「あ、あぁすまないご老体少し考え事をしていた。」
「なんじゃと！わしゃぁまだ６８の現役じゃッ！まだまだ舞鶴のジジィには負けんよ！あとわし此処の提督じゃから。」
「うぇっ!?て、提督だったのか？す、すまない！若い人がやっているのだと思っていたのだから。」
「すまんの～若い美男子じゃなくてすまんの～（怒）まぁいいわい。まずは執務室に行くぞ。そこでお主の着艦や報告やらの仕事を終わらせてから案内等をしようと思っとる。」
「了解した。」
「フムよろしいでは行こうかの。」
　そう締めくくり工廠から出ていった。

「さて自己紹介をしようかの。」
　執務室に着き備え付けの椅子に座り一拍開けてから言い始める。
「わしの名前は忠盛源三。先程も言った通り此処、横須賀鎮守府に勤めておる。階級は元帥。まぁ海軍の中で一番エライっちゅうわけだがどうでもいい。沢山居るしの。」

笑いながら階級なんて言った通り心底どうでも良さそうに言う。

「とりあえず武蔵やお主は此処、横須賀鎮守府で戦って貰う。」

場の空気が変わり武蔵は気を引き締める。

「お主には此処日の本の国日本を護って貰う。本来ならばわしら海の兵や陸の兵で護るべきなのだが、深海棲艦にはそう言っても意味がない。何処からともなく現れた妖精さんの力を借り、造り出されるお主等の力を借りなければ戦えん始末。誠に申し訳ない。わしらが戦わずその責務をお主等に任せなければいけないその事に憤りを感じる。わしから言いたいことは一つだけじゃ。国を護るそれもだがそれ以前にお主自身の命を大切にしてくれ。死地に行かせる奴が何を言ってるんだ?と思うのも仕方ない。だがそれでもわしはもう誰かが死ぬのは見とうない。だから頼む必ず生きて帰ってこい。それだけじゃ。」

沈黙が場を支配する。

その状況で最初に口を開いたのは武蔵だった。

「了解した提督。私はそう簡単には死なん。私を誰だと思ってる?大和型二番艦武蔵だぞ?あのときのようには沈まんさ。」

鳩が豆鉄砲を食らった顔をし直ぐに小さな微笑みに切り替わる。

「そうか、そうじゃったな。ワッハッハッハ!」

背中側にある窓の方を向きながら笑う。再びこちらを向いたときその眼光は武蔵を見つめていた。
「頼むぞ武蔵よ。必ず生きて帰ってこい。」
源三の眼光に対して獰猛に笑い返しながら言う。
「任せろ提督。私は必ず生きて帰ってくるぞ。何があっても必ず帰ってくる。約束しよう。」
武蔵そう言いきった。
その言葉を聞き安心したのか少しの間目を瞑る源三。
少しして目を開け言う。
「ではこの話は終わりにして、各施設の案内をするとしようかの。」
「ん?そういうのは秘書艦とか他の艦娘に任さないのか提督?」
ふと疑問に思った事を言う武蔵。それに対して源三は
「今はな他の艦娘達を動かすことはできん。なぜなら他の娘達はお主の歓迎会をしているからじゃー!!」
いきなりテンション上げる源三。それに対してちょっと驚いてしまう。
「ふーむその態度は全く予想していなかったようじゃな。大丈夫じゃぞ?此処の夕食は美味じゃからのぅ。それに比叡には作らせておらん。あやつの料理は食べたら死ぬか

らのぅだから安心して楽しみにしていくがよい！」

武蔵はそういう訳じゃないんだけどなーと思うが内心は嬉しく思っているのも事実。

その事に気づき思う。

（この体になる前の私はこのような出来事は少なかったのだろうか？）

そう思いながら己の提督に案内されながら歩く。そして最後は楽しく愉しい歓迎会へ誘う。

第４話

ふと目が覚めた。
その行動でいつの間にか寝てしまっていたことに気付く。
（いつの間にか寝てしまっていたようだな。案外疲れが溜まってたのかもしれないな）
そう考えベッドから立つ。
今の時刻知ろうと思い壁に備え付けてある時計を見る。時計の針は１２時を少し過ぎた所を指していた。
（とりあえず昼食でも食べようかな）
そう考え部屋から出る。
食堂に行きながら昔の事を思いだし考える。
（確かあの後は提督と一緒に食堂に行って歓迎会を受けたんだよなーまぁなんやかんやあって大和の事を姉さんって呼ぶことにしたんだっけな）
回想に耽り少し頬が緩む武蔵。
思いに浸りながら歩いていると通路の左側から誰かが歩いてやって来る。
「おぉ！武蔵ではないか。」

こちらの顔を見て話しかけてきたのは忠盛提督だった。
「あぁ提督か、あちらから歩いてきたが何処に行くのだ提督？」
「いや、のぉ舞鶴のちびっこからの報告が来てのー、あのイ級と会ったそうでな」
今となっては会う機会も多く、親友という関係と言っても過言では無い関係の少し変わった深海棲艦のことである。
「あのイ級とか!?どういう機会で出会ったのだ舞鶴の提督は？」
その言葉に対し忠盛提督は目をそらし言いづらそうに言う。
「いや、あのな？お主ら艦娘とは第二次世界戦争で生まれた軍艦が人の形を得たものだとわしは思っておる。」
話してて尚目をそらしたりして焦れったい為少しイラついてくる。
「提督言いたい事があるならさっさ言ってくれ、話が進まんぞ？」
「むぅすまんの武蔵。では言わせて貰おう。艦娘が深海棲艦に乗って舞鶴に来たそうだ。」
・
・
・
「提督」

「何じゃ」
「とうとうボケたか？」
「失礼な！わしゃまだ現役やっちゅーの！」
「だがなぁ提督。さすがに艦娘が深海棲艦に乗って来たというのはなぁ」
「だがしかしのおさっき話した軍艦が人の形を得たものとわしは言ったじゃろう？」
「まぁ言ってたな。なにか関係でもあるのか？」
「その乗ってきた者がの正確に言えば少し違っての、軍艦ではなく清掃船らしい。」
　その言葉で武蔵の目が優しい目になり、忠盛提督の肩に手を置いて言う。
「提督。明日私と共に病院に行こう、きっと日頃の疲れが出ているんだ。せめて休もうじゃないか。」
「武蔵ぃぃぃ！わしゃまだ現役だと言っとるだろーがっ！」
　さすがの提督も怒らずにはいられなかった。だがその怒りもどこ吹く風のごとく受け流す武蔵。
「まぁ落ち着け提督。そう怒ってたら高血圧で倒れるぞ？」
「ハァハァ、そうさせたのはお主なんじゃがのうハァ。」
「だが何故清掃船？意味が分からんな。」
「もうあれじゃ世界の神秘は凄かったで良いんじゃないかのぅ」

何かを諦め悟った顔で言う。
「そう、なのか？」
「知らん、まっわしからは以上じゃな。それで武蔵よお主も遅かったがどうしたんじゃ？」
「私か？いや、此所で造られたときの頃を思い出していたらいつの間にか寝ていてな、それで少し遅れてしまったよ。」
少し笑いながら言う。だがその裏に隠れた疲れを見逃さなかった。
「お主またあの夢を見たのか？」
その言葉に苦虫を噛み潰したような顔をする。
「やはり誤魔化せんか提督には。」
申し訳なさそうな顔を見て、忠盛提督は
「お主はバカじゃろう？八年も居れば分かるわい。お主はどこか子供っぽいの～ホント。」
呆れながら言われる。
「お主にいつもわしで良ければいつでも相談に乗ってやるぞ？と言っとるのに何で来ないかのー？」
「何かあればいつも姉さんに相談してるからかな？」

「まさかの大和に盗られた！わしの孫をぉぉぉ！」
「それを言ったら大和は姉だぞ？」
「あ、そうじゃった。まぁいいわいそれにしてもお主が造られたときの頃かぁーとなればまだ他のところの武蔵と外見が違わないときかの、」
　先程まで明るい声だったのが次第に低く暗いものになる。
　続けて言う。
「その髪もその目もあの作戦で変わってしまった。わしが浅はかだったが故に・・・！」
　その顔は怒りに歪んで行く。
「提督」
　静かに諭すように言う。
「私はあのときの事を後悔してない。この姿になったのも武勲だと思っている。提督や姉さん達が帰ってくる場所を守れたんだから後悔などするわけ無かろう？」
　その言葉に少し落ち着いたようだ。
「すまんな武蔵。お主がそう言ってもわしの中ではまだ後悔が残っておる。あの作戦がああなるとは思っとらんかったからの。」
　忠盛提督の悔やむ声を聞きながら思い返す。嘗ての戦場を。
「誰も予想できなかった。あのＡＬ／ＭＩ作戦で起きたことは予想など出来はせんよ。

誰もな・・・。」

ふと目を閉じても思い出せるあの作戦。造られてから少し経ってから行われた作戦のことを

今でも鮮明に思い出せる。

私の左眼が彼奴の眼になった日の事を。